

なんとかしたいバイオ専門用語

『細胞生物学辞典』(第2版)を訳し終えて

林 正男

やっとのことで“Dictionary of Cell Biology”(2nd edition)を翻訳した。『細胞生物学辞典』(第2版)として共立出版から間もなく出版される。だいぶ前に初版を翻訳したので、その大変さを知っていたが、やはり、辞典の翻訳はとて大変だった。翻訳作業のあいだ、頭のなかにいろいろなことが去来した。その最たる思いは「専門用語はなんでこんなにできが悪いんだろう」、そして「専門用語の諸問題を誰かがまじめに考えないとマズインじゃないか」ということだった。

そもそも言葉を考えるのは文系の人間の仕事だと理系の人は考えている。でも理系の言葉は文系の人にはわかりにくい。専門用語ともなればその分野の人にしかわからない(マテヨ、厳密にいうとその分野の人でもわからないかもしれない。だから『細胞生物学辞典』を訳したんじゃないかな)。とにかく、専門用語の諸問題はその分野の研究者自身に責任があるだろう。じゃ、これはそれぞれの学会の仕事だな。もっと高所にたてば文部省だな。文部省はナニやっとするんじゃ、と思いついて、そういえば約10年前に文部省学術国際局学術情報課が音頭をとって学術用語集を作ったのを思い出した。けど、研究者の皆さんは、この『学術用語集』をふだん使っているんでしょうか？

同じ“言葉”であっても、場合によって人によって、異なったニュアンス、理解、概念を与え、異なった想像力をかきたてる。つまり、どんな言葉もそれぞれ異なったニュアンスをもっている。文学なら、このニュアンスの多様性をたくみに操って、修辭学的に独特な表現や味を盛り込める。それが言葉使いのたくみな作者の作風や文体であつたりする。

しかし、科学技術を含め、多くの社会活動では、言葉は共通の概念、それも誰に対してもまったく同一の概念を記述し伝える手段である。科学技術の世界では、そのエッセンスをまとめて“専門用語”とよんでいる。しかし、専門家なら誰でも専門用語を簡単に理解できる、というわけではない。大学生や大学院生にはもっとむづかしいだろう。だからこそ、各々の分野の辞典

がたくさん出ているのだ。ましてや一般の人にとっては「それ日本語ですか？」と聞きたくなるほど難解である。…ど、どうしよう。

ま、あまりリキまないで、ここでは、細胞生物学を中心に科学技術の専門用語全体に関して感じたことを述べてみたい。

言葉を使う基本の第1は、正確であること、第2は、わかりやすいこと、第3は、面白く、味があることだ。

第1の“正確さ”と第2の“わかりやすさ”の2つは残念ながら、しばしば衝突するが、ここでは“わかりやすさ”を中心に取りあげよう。

一般に、科学者の大半は自分が読むときは“わかりやすい”のを好むのに、自分が表現するときは“わかりやすい”のを無視する傾向にある。“わかりやすい”ことよりも“カッコいい”ほうを優先する。たとえば、日本人だけが対象の講演会や学術研究発表会で、しかも日本語で講演するのに、なぜ英文のスライドを使うのだろうか？“カッコいい”と思いついてるからだ。聞いてくれる人が“わかりやすい”ためじゃない。

ついこの間、筆者の所属する大学で博士論文の審査をした。これが、ナント、英文の博士論文だった。審査する教官5人全員は日本人である。論文の内容はそこそこだったが(甘く見てだけど…)、英文のヒドきは相当立派なものだった。審査委員長は、審査会で開口一番、「私としてはこの論文の英語を読むのは大変でした。……これを審査せよというなら、私の結論は不合格です」と強い口調で不満げに述べられた。他の審査員はしばし沈黙(筆者、心の中で拍手)。その後の審査は難航をきわめた(本人は知らないだろうけど)。

さて、この大学院生はなぜ論文を日本語で書かなかったのだろうか。指導教官に「先生のところは英語で書くように指導しているのですか？」と尋ねてみた。「そんなことはないよ。英語で書いたのはこの学生が初めてだよ」とおっしゃった。この学生は外国人留学生でもなければ外国への留学経験があるわけでもない。筆者がカンぐって考えると、この大学院生は「書いた論文」を研究成果を伝えるための手段と思っていないにちがいない。英文で書いたという“カッコいい”アクセサリーと考えたようだ。“論文”もアクセサリー、“博士号”もアクセサリー。そして、どうやら“研究そのもの”もアクセサリーと思っているフシがある。

「最近の若エヤツァー、ナニ考えとるんじゃ」と怒ってもしょうがない。そういう“カッコいい”という価値観を肯定的に考えてみると、どうなるだろう。

他のいろいろな要素がからんでくるが、言葉だけに限ると、この“カッコよさ”はどうやると達成できる、と思われているだろうか？ ①英語そのものを使う(英語発音のこともあれば、単に英語表記やカタカナ表記

のこともある)、②英語の専門用語を使う、③スラング・略称を使う、④漢字を独特に読む(たとえば、骨をコツと読む)、⑤一般の社会生活では使われないような古い日本語・漢字を使う。などである。つまり、一部の“わかる”人にだけ通じ、多くの聴衆に“わからない”言葉を意図的に使うという手法だ。

なぜか? 日本では、講演会や研究発表会で話す場合、“話した”という行為そのものが業績であり、自分の存在の誇示であって、“聴衆に何を伝えたか”はあまり問われないからだ。つまりショーであり、パフォーマンスが大事で、“カッコよければいい”，ということになってしまった。

これじゃ、日本語がよくならないわけだ。おまけに、「科学を記述するのに日本語は適していない」というよからぬ俗説が一部にあって、科学を記述するための日本語の進化を阻害する考えもある。

これには研究者が大いに反省しなければならない。たとえば、医学や工学では日本語の原著論文をまだ見かけるが、細胞生物学や分子生物学では日本語の原著論文を見たことがない。細胞生物学や分子生物学の原著論文を日本語で書いていかないと、いずれ、細胞生物学や分子生物学の記述を日本語でできなくなる日がやってくる。いやもう来ているのかもしれない。日本語を進化させる努力を欠いて“カッコいい”のにまかせてしまうと、パソコンの世界のように、わかっている人だけにしか通じないカタカナ語がハンランするようになってしまう。

パソコンの話が出たついでにしておくが、吉木本晴彦の「日本語が消滅する日」(三田文学, 1997年)によれば、『漢語大辞典』には約6万語の漢字があるのに、現在パソコンで使えるJIS第一水準・第二水準の漢字総数はその約10分の1の6,353文字に制限されている(日本のパソコン会社の一存で)。さらにアメリカのパソコン会社の一存で文字コード体系の世界標準が1992年に作られ、日本、中国、韓国などの漢字文化圏の文字総数は20,902文字と決められてしまった。このうち5,800文字はハングルに当てるといふ。これで日本で使っている約6万語の漢字の75%以上は、今後パソコンでは永久に使えない、つまり事実上消滅するというわけだ。パソコン会社の都合でやったことだが、決められた枠は日本の文化の根幹を決定してしまうのである。細胞生物学の専門用語どころの話ではない、日本の文化全体の問題である。

話を本題にもどそう。問題は細胞生物学の専門用語であった。専門用語をなんとか“わかりやすくする”ためにはどうしたらいいのだろうか? 文句ばかりいわないで、提案してみようと思う。

第1の提案: むつかしい漢字の使用をやめる

“むつかしい”というのは画数の多い字だ。そこでまず、自分ではその概念を意味する漢字を使っているけど、自分自身はその漢字を書けない、場合によっては

読めない、そんな漢字を変えようじゃないの。

たとえば、「囊(のう)を袋(たい)とする」ではどうだろう。囊という漢字と読みは、口語でも文語でも多くの人が使っていると思う。しかし皆さん、この漢字を書けますか? たとえ書いても、これを書かせる手間のプラスとマイナスを考えると、マイナスのほうが大きいと思う。囊は、cisternaの囊, cystの嚢胞, gizzardの砂囊などなど、熟語としてもいろいろ使われている。これを袋, 袋胞, 砂袋, としたらどうしてもマズイだろうか? こういうむつかしい漢字は1981年内閣告示の「常用漢字表」にはもちろん入っていない。でも、現在、文部省公認の動物学用語中には、ナント、100字以上も入っている。

ではつぎに、「膠細胞(こうさいぼう)→粘細胞(ねんさいぼう)」ではどうか。膠細胞はグリア細胞(gliacell)のことである。研究者が学会などで通常「こうさいぼう」とよんでいるだろうか? 少なくとも、筆者は聞いたことがない。「グリア」「グリア細胞」「グリアセル」と言う人が圧倒的だ。文語上は使われても口語上は誰も使わない死語である。こういうたぐいの用語も変えたほうがいい。「膠」はにかわ、つまり接着する「のり」の意味だ。では、粘細胞、糊細胞、接着細胞などとあげてみた。ウーム、そう名案でもないけど、簡単な粘細胞はどうだろう。

てな具合に、なんとか工夫してやさしい日本語の専門用語を作っていくべきだ。

一般的に言って、この手の“むつかしい”日本語は解剖学用語、系統分類学用語に多い。それらが日本に輸入され、専門用語が作られた時代が漢字文化のときだったせいだが、だからといって時代の変化に合わせて進化させてこなかったのは誰かさんの怠慢じゃなからうか。

第2の提案: カタカナを現地語発音にすべきだ

初めてアメリカに留学した20年前、日本語化してしまった英語にはいろいろ泣かされた。カゼインで通じないけど、ケースインなら通じる。エーテルでなくてイーサー。日常会話でもトマトでは通じないけど、タメイトゥなら通じる。クレームをつけるんじゃないで、コンプレイン。ドルじゃなくてダラー。駅にあるのはホームではなくてプラットフォーム。1ダースじゃなくて1ダズン。食べ放題はバイキングじゃなくてパフェ。アンケートじゃなくてサーベイ。これらは氷山の一角である。

このようにすでに日本語の日常用語になってしまったカタカナ語は仕方ない。だろうか? そうとあきらめないで何とかしたい。

これから日本語化される英語専門用語は、少なくとも日本語的な発音表記にしないほうがいい。原語の発音をそのままカタカナ表記にしてほしい。

たとえば、以下のように英語発音をそのままカタカナ表記したほうがいい例はたくさんある。

[現在]	[提案]
ストリキニーネ	→ ストゥリキニン
ズブチリシン	→ サータライシン
ワクチン	→ ヴァクシーン
チラコイド	→ サルカロイドゥ
ドデシル	→ ドデクル

今回出版した『細胞生物学辞典』には、アメリカ人細胞生物学者が発音した細胞生物学用語をそのままカタカナで表記したから、ご用とお急ぎでないお方はそちらを見ていただきたい。「そんなモン、わかっとな！」とおっしゃる大先生にご質問。“t antigen”をどう読みますか？（答は脚注）

日本人科学者は日本語だけでなく英語も憶えなくてはいけないというハンディがある。しかし、実はハンディはもっと重い。たとえば、フィブロネクチン (fibronectin) を英語として憶えたとしよう。ところがどっこい、フィブロネクチンと発音したのではアメリカ人に正しく通じない。「ファイブロネクティン」である。つまり、日本人にとって、①日本語、②日本人にのみ通じる英語の読み方とカタカナ、③英語圏で正しく伝わる英語の読み方、④英語の文字、の4種類を使い分けなくてはならない。このうち、②はまったく無駄な要求でありシステムだと思うが、どうだろうか？
第3の提案：専門用語をできればカタカナよりも漢字にすべきである

これは第2の提案でカタカナ語を是認しているので少し矛盾するかもしれない。漢字は表意文字である。文字そのものに意味が含まれることが大切だ。このことにより連想が進み、新しいアイデアが生まれる。たとえば、好塩基球 (basophil) とあれば、その実体をよく知らなくても塩基を好む血球だと推定できる。そこから、逆に酸を好む血球というものもあるかもしれないと思いをせられる。塩基を好むなら、酸性の高分子を多く含む血球にちがいないとも想像できる。これがバソフィルと書かれてしまうと、思考はそこで止まってしまう。せいぜいウィーンフィルのフィルと同じフィルかなと思うぐらいだろう。他分野の日本人にとって、“バソフィル”と書かれたカタカナ語そのものを知らなければそれまでである。しかし、好塩基球と書け(言え)ばそれなりのイメージができる。だから、豊かな科学技術文化を目指すのなら、専門用語もなるべくなら表意文字の漢字にしたい。

ところが、時代はカタカナ語ハンランの時代だ。そして時代は徐々にカタカナにもせず、英語の spelling (つづり) を日本語文章のなかに入れ込む situation (状況) が起こりつつある。国に近いレベルでは NTT, JR ときた。企業名では SEIBU, Meiji など、あちこちにそのまますのアルファベットがある。

〔答〕[スモウ ティ アンティジェンと読みます。スモウとつけられた先生、オメデトウございます。]

第4の提案：各学会がその分野の日本語の基準作りにリーダーシップをとるべきである

専門用語の問題は、細胞生物学の現場の研究者である筆者一人が吠えたところで大きな意味はない。自民党の文教政策部会か経団連にでも話をもちこんだほうが早いかもしれない。しかし、常日頃、現場の科学技術者たちがオープンに議論し、検討し、妥当な提案をすることが必要である。そして、その結果を、マスメディアや研究者社会に採用してもらわなくては意味がない。

いつも、言葉は変化する。いままで使われていなかった新しい言葉が今日生まれ、またそれまで使われていた言葉の意味が明日変わったり、捨てられていく。そういう変化に常時対応していかなくてはならないのである。だから、科学技術用語センターみたいなものを作る一方、既存学会にその学会の専門用語を検討する機能を付加してほしい。そこでは普通の市民にも入ってもらい、普通の市民がわかる言葉も作ってほしい。もっとも、筆者が知らないだけで、学術審議会の学術用語分科会というところがそういう活動をしているんでしょうか？

そういえば、アメリカの元大統領レーガンは、日本では以前レーガンと表記されていた。トルコ風呂だってソーブランドに変わったし、ビジネスガールもオフィスレディに「イチニのサン」で変わった。この際「いっせのセッ」とおかしな専門用語をまともな言葉にしたらどうだろう。「といっても、何かキッカケでもない」というなら、大きなキッカケがあります。行財政改革の一環として(チョット変かな)とか、地球環境問題の一環として(さらに変か!) じゃなくて、2001年1月1日をもって新しい門出とするのはどうだろうか。諸学会、マスコミ、官庁のオノオノ方、「いまから2年間のうちに何とかせい」。鶴といたいところだけど蚊の一声。

(Masao Hayashi, お茶の水女子大学理学部)